

日本橋オペラ 2016

プッチーニ作曲 歌劇「トスカ」

TOSCA

2016 年

4 月 30 日 (土) 13:00

日本橋劇場



ごあいさつ

本日は、日本橋オペラ 2016 歌劇「トスカ」にご来場頂きありがとうございます。日本橋オペラでは昨年、旗揚げ公演としてワーグナーの大曲「トリスタンとイゾルデ」を上演しました。さまざまな制約の中、お陰さまで、日本人だけで初となるトリスタン全曲の公演を無事終えることができました。（ロビーで、昨年のプログラムを無料で頒布しています）今年の選曲にあたりまづ考えたのは、お客様にオペラを心から楽しんで頂きたいという気持ちです。ゴールデンウィークの1日を日本橋界隈にお出かけ頂き、2～3時間のオペラを鑑賞して、これなら来年も来たい！という皆様のお顔を思い浮かべながら「トスカ」を選曲しました。

演出は二期会研修所でお世話になっていた十川稔先生にお願いをして、厳しくも綿密な稽古を重ねて参りました。主要キャストであるカヴァラドッシの小貫岩夫さんは、私が大阪音楽大学のピアノ科に入学した頃に、同大学の声楽科を卒業され、その後東京でよくすれ違い、是非一回ご一緒したいと願っていました。また影の主役であるスカルピアには、二期会研修所でよく拝見していた斎木健詞さんにお願いしました。斎木さんは兵庫県立芸術文化センターの「トスカ」でも同役を歌っておられ、初役が多い今回のプロダクションに安心感を与えてくれました。ここ日本橋劇場は普段、落語などの伝統芸能で使われることが多く、オケピットがなく、また舞台も小さいのでオーケストラの人数と配置は大きな問題です。今回は、私が大阪フィルと共に演した際にコンマスを務めていらした渡辺美穂さんにご相談して、美穂さんの友人の奏者に集まって頂きました。大きな驚きと喜びですが、オーケストラのメンバーには東京や大阪の日本を代表するオーケストラの首席奏者や、各方面で活躍する魅力的な方々が集まりました。指揮者の佐々木 修さんは、すでに何年間もワーグナーなどでご一緒して、編曲やプログラム作りまで事務局をお願いしています。

私事ですが、昨年から今年にかけて、ブルガリアとスロバキアで「蝶々夫人」を続けて歌うことができました。私にとってヨーロッパで初めてのオペラの舞台でしたが、その両方の公演とも、日本のオペラ制作とは違って、本当に1～2回の簡単な打合せだけで舞台に上がります。ブルガリアに至っては、本番の1時間前に相手役のピンカートンが急遽変更になり、ぶっつけ本番になりました。ところが、指揮者もオーケストラも歌手も、何事もなかつたように、むしろその緊張を楽しむかのように進行していきました。それが出来るのは、もちろん演目がレパートリーとして皆の体に染み込んでいるということですが、もう一つ忘れてはならぬのが、普段の稽古の厳しさです。ヨーロッパの劇場の稽古では、同じところを2回間違つたら即退場です。退場とはその人は一生その劇場とは縁がなくなるという意味であり、日本式の、次回は勉強してきますとは違います。日本橋オペラでは、音楽の国際標準を持った人たちが、さっと集まり、さっと粹なオペラを上演して、さっとワインを飲みに行く・・・そんな公演がいつの日か、いいえ今日できたらと願っています。

日本橋オペラ代表 福田祥子

日本橋オペラ 2016

歌劇「トスカ」

全3幕／イタリア語上演／字幕付
原作 ヴィクトリアン・サルドゥ
台本 ジュゼッペ・ジャコーザ／ルイージ・イッリカ
作曲 ジャコモ・プッチーニ
編曲 (室内オーケストラ) 佐々木修

2016年4月30日(土) 13時開演

日本橋劇場(中央区日本橋公会堂4F)

第1幕:50分 休憩:20分 第2幕:45分 休憩:20分 第3幕:30分

指揮 佐々木修

《配役》
トスカ 福田祥子
カヴァラドッシ 小貫岩夫
スカルピア 斎木健詞
アンジェロッティ 勝村大城
堂守 金子亮平
スボレッタ 堀越尊雅
シャローネ 上田隆晴
看守 吉永研二
羊飼い 宮下あづみ

《合唱ソリスト》
沼田真由子
宮下あづみ
濱野奈津美
高嶋康晴
森谷健太郎
山田健人
伊東達也

《稽古ピアノ》
山岸真紀子 鈴木架哉子
松井理恵 小滝翔平

演出 十川 稔

《スタッフ》
美術 升平香織
衣装 岡本孝子
照明 矢口雅敏
演出助手/舞台監督 手塚優子
ヘアメイク エイミー前田
字幕 まくうち

《演奏 日本橋オペラアンサンブル》

渡辺美穂 I. ヴァイオリン・コンサートマスター
小池彩織 II. ヴァイオリン
村松 龍 ヴィオラ
大内麻央 チェロ
佐々木晶子 コントラバス
島田沙織 フルート
大森 悠 オーボエ
西崎智子 クラリネット
依田晃宣 ファゴット
熊井 優 I. ホルン
嵯峨郁恵 II. ホルン
小原由紀 打楽器
衣福健太郎 ピアノ

主催 日本橋オペラ

共催 ディーヴァ株式会社 株式会社マエストロ

協力 日本橋オペラ研究会 東京国際芸術協会

予告:2017年4月22日(土)日本橋劇場『椿姫』(予定)

あらすじ

第1幕

ローマの聖アンドレア・デラ・ヴァッレ教会。政治犯のアンジェロッティが、慌しく駆け込んで来る。彼は妹に牢番を買収させ、脱獄したのである。そして妹が隠して置いた、礼拝堂の鍵を探し出すと、その中に逃げ込む。すると画家のカヴァラドッシがあらわれ、キャンバスの覆いをとって、マグダラのマリアの像を描き始める。モデルは、アンジェロッティの妹である。モデルの美女と彼の恋人、歌姫のトスカを比較してうたう、アリア「妙なる調和」。すると礼拝堂から、隠れていたアンジェロッティが姿をみせ、旧友のカヴァラドッシと顔を合わせる。そして友達の脱獄を知ると、その彼を助けるべく、昼食に用意した食べ物とワインを与えて、自分の別荘に潜伏するように勧める。

そのとき外部からトスカの呼ぶ声がするので、再びアンジェロッティを礼拝堂に隠す。入って来たトスカは人のいた気配があるので、モデルの美女と逢引していたのではと、疑いをかけて嫉妬するが、カヴァラドッシは絵の中の美女よりも、君の方が何倍も美しいとなだめて、彼女を外に送り出す。間髪を入れずアンジェロッティを連れ出すと、隠れ家への道筋と、何かあれば古井戸に隠れるよう指示するが、そのとき政治犯の脱獄を知らせる大砲が鳴り響き、急いで2人は教会を後にする。そこへ堂守があらわれ、カヴァラドッシがいないのを不審がっているところへ、信者や聖職者がやつて来て、ナポレオンが大敗したという話題で盛り上がる。

突然警視総監のスカルピアが、大勢の警官を従えてあらわれ、政治犯が脱獄してこの教会に逃げ込んだといって、特に入念にアッタヴァンティの礼拝堂を捜査するように命じる。部下のスポレッタは礼拝堂から、アッタヴァンティ家の紋章の入った扇と、昼食用のバスケットを見つけて来る。また画架の聖女の顔が、彼の妹とそっくりなのに気付いて、スカルピアは彼がここへ逃げ込んだと確信する。そこへ何も知らないトスカが戻って来て、今夜は祝賀会でうたうことになり、デートは中止だと告げに来たのに、カヴァラドッシがいないのでがっかりする。するとスカルピアはトスカに近付き、例の扇をみせつけて彼女の嫉妬心を煽り立てる。彼女は彼が絵のモデルの美女と、別荘で逢引しているかも知れないと疑い、現場に直行しようという。スカルピアはすぐにスポレッタを呼び、トスカを尾行するように命じる。彼はにんまりとほくそ笑み、トスカよお前の心の中には、このスカルピアが住み着いたぞと独り言をいう。オルガンが鳴り響いて、枢機卿の行列が通り過ぎる。聖歌隊は「テ・デウム」をうたい、祝砲と鐘が響き渡る。そして枢機卿は人々に祝福を与え、大合唱が大きく盛り上がる。スカルピアはカヴァラドッシを逮捕し、トスカを我がものにしようと決心する。

第2幕

ファルネーゼ宮殿の一室。スカルピアが夕食をとっているところへ、カヴァラドッシが重要参考人として連行されて来る。窓の外からは戦勝祝賀会でうたう、トスカの歌声が聞こえている。警視総監は数々の証拠を挙げて、カヴァラドッシを攻め立てるが、彼は頑として口を割らない。心配して駆けつけて来たトスカがあらわれると、スカルピアはカヴァラドッシを拷問室に入れて、激しい拷問を加えて、逆にトスカをからめ手から責める。ついに彼女は愛する男の悲鳴を聞いて、「庭の井戸の中に」と自白してしまう。それを知ったカヴァラドッシは、口惜しさの余り悶絶してしまう。

そこへ伝令の報告で、戦いに勝ったのはナポレオンの方だと分かり、カヴァラドッシは元気を取り戻し、スカルピアを罵倒するので、激怒した警視総監は彼を牢に収監するよう命令する。トスカとスカルピアの2人だけになると、彼女は恋人の命を助けるよう懇願するが、その代償としてスカルピアはトスカの体を要求する。絶望した彼女は有名なアリア、「歌に生き、愛に生き」をうたって自らの非運を嘆く。そしてトスカはスカルピアの要求に屈して、愛するカヴァラドッシのために、身を犠牲にしようと決心する。それを聞いたスカルピアは部下のスコレッタに、パルミエリ伯爵のときのように、ほんの形式のみの銃殺にするようにと命ずる。部下が下がるとスカルピアは、彼女に襲いかかろうとするが、彼女はカヴァラドッシが自分と、国外に脱出出来るよう許可証を書いてくれと要求する。仕方なしにスカルピアは、それを書くために机に向かう。そのとき彼女は食卓のナイフに気付き、素早くそれを後ろ手に隠す。スカルピアは約束どおり許可証を書き、さあこれでお前は俺のものだと、両手を広げて抱きつこうとした瞬間、トスカの手にしたナイフが、深々とスカルピアの胸に突き刺さる。「これがトスカの接吻よ」、スカルピアは助けを求めるが、その場に倒れ間もなく絶命する。トスカはスカルピアの手から、許可証を奪い十字架を死体の胸に置き、頭の両側に蜀台を置いて、そつと忍び足で部屋の外へ去って行く。

第3幕

夜明け前のサンタ・アンジェロ城の屋上。羊飼いの少年の歌が聞こえ、そこへ銃殺刑のため、カヴァラドッシが連行されて来る。彼は看守に指輪を与えて紙とペンを貰い、愛するトスカへの手紙を書こうとする。楽しかった思い出を回想しているうちに、ついに感極まって号泣する。全幕の中で最も有名なアリア、「星も光りぬ」がここでうたわれる。そこへトスカがやって来て、今までの経過の一部始終を報告して、出国許可証をみせながら、この手でスカルピアを殺したこと、銃殺は形式だけだと説明する。兵士たちがあらわれ、処刑の準備が完了する。4時の鐘が鳴つて所定の位置に兵士たちがつき、轟然と銃が一斉に火を吹き、目隠しされたカヴァラドッシが倒れる。兵士たちは検視を終え、死体にマントをかぶせて整然と行進しながら去る。じつと見守っていたトスカは、遠くからまだ動いては駄目よと声をかけ、さあマリオ早く逃げましょうと、彼の体を揺さぶる。だが彼の体は、石のように動かない。慌ててマントを剥ぎ取ると、カヴァラドッシの胸は朱に染まっている。銃殺刑は、形式だけだったのではなかった。彼女は絶叫して、その場で死体に取りすがる。すると大勢の兵士たちが、城壁の階段をかけ昇ってくる。彼らはスカルピアが殺された、殺したのはトスカだ、捕まえろと口々に叫んでいる。彼女は追い詰められ、スコレッタに捕まりそうになるが、一瞬彼を突き離して城壁にかけ登り、おおスカルピアよあの世でと叫んで、空中に身を躍らせる。兵士たちは驚いて、城壁から下を見下ろすところで幕になる。

出典：モバイル音楽辞典 (C) 出谷 啓

マスカーニ『カヴァレリア・ルスティカーナ』(1890) に始まるヴェリズモ・オペラの誕生から十年、“オペラの世紀”19世紀の最後の年、1900年に『トスカ』は初演されている。19世紀には、ヴェルディとワーグナーという二人の巨人が、歌劇場レパートリーの核となる数々のオペラを残した。続く20世紀は考古学的博物館の時代で、18世紀のモーツアルトの美が再発見され、17世紀のモンテヴェルディ、18世紀のヘンデルに代表される数々のバロック・オペラも舞台上に蘇った。今日、歌劇場のレパートリーは、1600年頃に始まるオペラ史の全域に跨っており、その中では20世紀オペラはほんの末席を温める存在でしかない。

20世紀の芸術は、19世紀末に生まれたリアリズム（写実主義）を根幹とし、受け入れるにせよ否定するにせよ、リアリズムに対する認識や考察から生み出されてきた。オペラも例外ではない。プッチーニのオペラはヴェリズモ（真実主義）とみなされることもあるが、もっと劇場というものに深く根ざした、虚構とリアリズムが出会った舞台芸術であると思う。プッチーニほどの劇場の玄人なら、ヴェリズモに留まることなく、その先にあるオペラの可能性を見据えていたに違いない。『ラ・ボエーム』(1896)、『トスカ』、『蝶々夫人』(1904)、遺作となった『トゥーランドット』(1926)などはその成果といえよう。

『トスカ』の原作は1887年に、当時“聖なる怪物たち”と呼ばれていた興行主＝大女優の一人サラ・ベルナールのために、フランスの劇作家サルドゥが書いた戯曲である。それはサラの“芸”を最大限に引き出すための虚構の劇世界であり、リアルではあっても現実の日常的生活の再現などではない。それをリブレットに纏めたイッリカとジャコーザ、音楽の衣を纏わせたプッチーニ、このイタリア・オペラの“黄金のトリオ”は20世紀を目前に、どのようなオペラを創造しようとしたのか。

音楽が付くことによって時間は引き延ばされ、台詞は削られ、リアルさからは遠のく。1800年のローマを舞台とし、5幕あった原作の筋立ては3幕に端折られ、ナポレオンの侵攻とローマ共和国、それに対するナポリ王党派の反動などの政治的背景や、王妃をめぐるアンジェロッティとスカルピアの社会的立場や、祝勝カンタータの作曲家パイジェルロと歌姫トスカとの口喧嘩などは省かれている。それに代わって、豊かな歌唱旋律による濃密な感情表現、強烈な力感あふれる管弦楽による劇的なアクション、三曲の名アリア“妙なる調和”“歌に生き、愛に生き”“星は光りぬ”が加わった。オペラは劇場の人気レパートリーとして残ったが、サルドゥの原作は忘れた。日本でも1963年に三島由紀夫が文学座の名女優、杉村春子のために脚色し上演されたことがあるが、寄せられた世評は「やっぱり音楽のないトスカはつまらない」であったという。

そう、音楽のある『トスカ』は、21世紀の今日でも面白い。第二幕、トスカとスカルピアとの会話の息詰まる緊張感、舞台袖から聞こえる小太鼓連打音の戦慄などは、プッチーニの劇場性が最高に發揮される場面であり、オペラが描き得るリアリズムの果て、極北といえよう。日常とは程遠い“歌う人間”という不可思議な存在のリアリティ。それはスコアの中にどのように在り、音楽の中からどのように立ちあらわれてくるのか。その歌を支える身体（からだ）のリアリティを出演者とともに発見してゆくこと。そこに演出家としての私の仕事があったといえよう。

今回の演出では、最終幕をサルドゥの戯曲のとおり、死刑囚が最期の告解をする聖アンジェロ城の祈祷室から始めることにした。その祈祷室にある聖母マリア像、第一幕の聖アンドレア・デッラ・ヴァッレ教会にもある聖母マリア像を、全三幕に共通する装置として舞台の中心に据え、全ての登場人物の信仰の象徴とした。修道院で歌を習い、世の人に神の御業を示すために歌姫となったトスカはもちろん、ヴォルテール派の画家カヴァラドッシにも、反動の警視総監スカルピアにも、神への信仰があり、そこに彼らの人間としての強さも弱さもあるのではないだろうか。

佐々木 修 (Osamu Sasaki) 指揮



武蔵野音大卒業。ザルツブルク・モーツアルテウム音大指揮科最優秀卒業。カラヤン、チェリビダッケなどの巨匠に師事。モーツアルテウム音大オーケストラ常任指揮者をつとめる。1979年カラヤン国際指揮者コンクールに入賞。1982年/1983年ザルツブルク国際モーツアルト週間で指揮「心から自然でしなやか、新鮮なモーツアルト指揮者」(オペラ・コンツェルト誌)と評価を受け、国際モーツアルテウム財団よりパウムガルトナーメダルを授与される。1984年ベルリン・ドイツ交響楽団を指揮して、リアス放送新人演奏会に出演。帰国後、日本各地のオーケストラ、合唱を指揮。またNHKや民放のパーソナリティー、音楽番組制作、女性向け携帯サイト『ルナルナ★女性の医学』の創設などマルチなタレントで活躍。近年はワーグナー指揮者として『ニーベルングの指環』全曲、『トリスタンとイゾルデ』と連続して指揮をして注目されている。日本橋オペラ常任指揮者。(株)マエストロ代表取締役

十川 稔 (Minoru Togawa) 演出



大阪大学文学部に学ぶ。75年早稲田小劇場(SCOT)入団、鈴木忠志の演出でギリシャ悲劇、シェイクスピア、チエーホフ等を演じ、ロサンゼルス・オリンピック芸術祭、ベネチア・ビエンナーレをはじめ20カ国70都市に及ぶ海外公演に参加。海外の演出家、俳優との共同作業も数多く、各国の俳優に鈴木忠志の舞台演技メソッドを教える。帝劇、水戸芸術館等にも客演。94年オペラ演出に携わり、新国立劇場、二期会、藤沢市民オペラ等で栗山昌良の演出助手を務める。モーツアルト、ヴェルディを中心に、バロックから現代まで数多くのオペラを演出。クーラウ『ルル 魔法の笛』を167年ぶりに蘇演(05)、米パーム・ビーチ・オペラ『蝶々夫人』(07)、錦織健プロデュース・オペラ『愛の妙薬』(09)『セビリアの理髪師』(12)『後宮からの逃走』(15)、舞台芸術共同制作『椿姫』(11)『滝の白糸』(14 作曲:千住明)等を演出。二期会オペラ研修所、東京藝術大学、聖徳大学等で舞台演技を指導。

福田祥子 (Shoko Fukuda) トスカ



大阪音大ピアノ科卒業後声楽に転向。大阪芸大大学院声楽専攻修了。第6回大阪国際音楽コンクール第2位。東京二期会オペラ研修所54期本科を首席で修了。これまで「ワルキューレ」「ジークフリート」「神々の黄昏」それぞれブリュンヒルデ役、「トリスタンとイゾルデ」イゾルデ役、「さまよえるオランダ人」ゼンタ役、「椿姫」「蝶々夫人」「トゥーランドット」それぞれタイトルロール、「ドン・カルロ」エリザベッタ役等に出演。『圧倒的に鮮烈な歌声と存在感。生まれながらのブリュンヒルデ』(音楽現代)と絶賛される。またCD「イタリア・オペラアリア集」は、『日本にも真に世界にも通用する本格的なオペラ歌手誕生か』(音楽現代)と推薦を受ける。ウィーン国立歌劇場とバイエルン国立歌劇場で研修を受けており、2015~2016年には、スタラ・ザゴラ州立歌劇場(ブルガリア)とコシチエ州立歌劇場(スロバキア)で、それぞれ「蝶々夫人」でヨーロッパデビューを果たしている。日本橋オペラ代表。



小貫岩夫 (Iwao Onuki) カヴァラドッシ

同志社大学卒業後、大阪音楽大学卒業。音大在学中の 95 年「魔笛」タミーノ役に抜擢され、テオ・アダムと共にデビュー。この成功により翌年、ケムニッツ市立歌劇場（ドイツ）に招聘出演し地元紙より好評を得る。文化庁オペラ研修所第 11 期修了。98 年度文化庁派遣でミラノへ留学。帰国後数々のコンクールで優勝・入選し、二期会、新国立劇場を中心に活躍。07／10 年二期会「魔笛」タミーノ役（実相寺昭雄演出）、11 年佐渡裕プロデュース「こうもり」アルフレード役などで喝采を浴びた。近年は立て続けに二期会のオペレッタで主役を歌い、なくてはならない存在となっている。コンサートでも、主要オケとの共演で高い評価を得ている他、テレビ・ラジオにも度々出演。2010 年から毎年、東京と大阪でリサイタルを開催し好評を得ている。2013 年天皇皇后両陛下御親覧の舞踏会で演奏し、お言葉を賜る他、フィレンツェではイタリア元首相夫妻主催のコンサートに招かれた。二期会会員



斎木健詞 (Kenji Saiki) スカルピア

国立音楽大学卒業。同大学院修了。二期会オペラスタジオ第 43 期マスタークラス修了。文化庁新進芸術家海外研修制度にてイタリアに留学。二期会ニューウェーブオペラ劇場「ポッペアの戴冠」セネカ役でデビュー、朝日新聞をはじめ各紙で絶賛された。その後二期会「ラ・ボエーム」「マクベス」「ドン・カルロ」、新国立劇場「カルメン」「アイーダ」、びわ湖ホール「海賊」（日本初演）「椿姫」「ワルキューレ」「オテロ」「リゴレット」、日生劇場「フィデリオ」「ドン・ジョヴァンニ」、兵庫県立芸術文化センター「トスカ」「椿姫」などの主催公演に出演し常に高い評価を受けている。最近ではびわ湖、神奈川県民、大分いいちこホールの「さまよえるオランダ人」ダーラント役で出演、存在感のある演唱で公演の成功に大きく貢献した。その他宗教曲やベートーベン「第九」のソリストとしても活躍、今後の活躍が益々注目される。第 78 回日本音楽コンクール第 3 位。二期会会員。



勝村大城 (Taiki Katsumura) アンジェロッティ

国立ミュンヘン音楽大学大学院修了。これまでに数々のオペラに主要な役で出演。2015 年 5 月には日本橋オペラ『トリスタンとイゾルデ』でクルヴェナルを、同月に二期会ニューウェーブ公演『ジューリオ・チェーザレ』ではアキッラ役で出演し、時代を問わない幅広いレパートリーと類稀な美声で好評を博している。またオペラだけでなく、合唱曲のソリストとしても活躍。鎌ヶ谷きらりホールのこけら落とし公演では第九のソリストを務めた。またドイツ歌曲のコンサートも多数開催しており、2016 年にはさいたま芸術劇場にてシューベルト「冬の旅」全曲公演で高い評価を得ている。音楽ユニット "Stammtisch" 主宰。二期会会員。



金子亮平 (Ryohei Kaneko) 堂守

東京学芸大学、リリカイタリアーナオペラ、イタリア留学などを経て現在に至る。イタリアにおいてはドン・ジョヴァンニ、ファルスタッフ、ルーナ伯爵役などで出演。



堀越尊雅 (Takamasa Horikoshi) スポレッタ

福島県出身。国立音楽大学音楽学部演奏学科卒業。声楽を久保田真澄、吉田浩之、佐藤淳一、高橋祐二の各氏に師事。第24回友愛ドイツ歌曲(リート)コンクール入選。これまでにJ.S.BachのカンタータやW.A.Mozart『戴冠ミサ』等、宗教曲におけるソリストを多数務める他、古楽アンサンブル、ドイツリート独唱など関東各地で演奏活動を重ねる。日本橋オペラの前公演、R.Wagner『トリスタンとイゾルデ』に出演以来、オペラへも意欲的に取り組んでいる。室内合唱団日唱(日本合唱協会)、コンツェントゥス・ムジクス東京、Affetti musicali、Vocal Consort Tokyo各メンバー。



上田隆晴 (Takaharu Ueda) シャローネ

東京音楽大学声楽演奏家コース卒業、同大学院修士課程オペラ研究領域修了。サントリーホールデビューコンサート2014に出演。これまでに『フィガロの結婚』アルマヴィーヴァ伯爵、『コジ・ファン・トゥッテ』ドン・アルフォンソ、『秘密の結婚』ロビンソン伯爵、『カプレーティ家とモンテッキ家』カペッリオ、『ラ・ボエーム』ショナール、『こうもり(日本語上演)』フランク、『ヘンゼルとグレーテル(日本語上演)』父親などを演じる。また日本歌曲や童謡、ミュージカルなどの演奏会にも意欲的に取り組んでいる。東京音楽大学非常勤助手、日本音楽生涯学習振興協会指導員、啓声会会員。



吉永研二 (Kenji Yoshinaga) 看守

大分県立芸術文化短期大学音楽学部声楽科、及び同大学音楽専攻科声楽分野を首席で修了。東京藝術大学音楽学部声楽科バス専攻を修了し、現在、武蔵野音楽大学大学院音楽研究科博士前期課程声楽専攻2年次在籍。これまでにバッハ作曲のカンタータやモーツアルト作曲の『戴冠ミサ』のソリストを務める。オペラでは『コジ・ファン・トゥッテ』グリエルモ、『愛の妙薬』ドゥルカマーラ、『魔笛』パパゲーノ、『ヘンゼルとグレーテル』父親等に出演。またコンテンポラリーダンスとの共演や環境保全の一環として演奏に赴くなど、活動は多岐にわたる。第80回読売新人演奏会出演。声楽を岩津整明、宮本修、福島明也、田口宗明の各氏に師事。



宮下あづみ (Azumi Miyashita) 羊飼い / 合唱

国立音楽大学声楽専修卒業。同大学院イタリア歌曲コース修了。二期会研修所第57期マスタークラス修了(優秀賞)。東京国際声楽コンクール、ソレイユ音楽コンクール入賞。文化庁若手育成オペラアリアコンサートをはじめ、様々な演奏会やオペラに出演。二期会会員。



濱野奈津美 (Natsumi Hamano) 合唱

国立音楽大学卒業。洗足学園音楽大学大学院修了。二期会オペラ研修所第55期マスタークラス修了。オペラではこれまでに「魔笛」侍女I、「ラ・ボエーム」ミミ、「カヴァレリア・ルスティカーナ」ローラ、二期会ニューウェーブ公演「ジューリオ・チェーザレ」ニーレーノ役等で出演の他、宗教曲の分野でも、モーツアルト「レクイエム」、バッハ「マタイ受難曲」等のソリストを務める。柳澤涼子、関定子の各氏に師事。二期会会員。



沼田 真由子 (Mayuko Numata) 合唱

武蔵野音楽大学卒業及び同大学院声楽専攻修了。大学院在学中にNTTドコモより奨学金を授与される。オペラ『ヘンゼルとグレーテル』(グレーテル、露の精)、『シンデレラ』(ノエミ)、二期会サロンコンサート等、多数のオペラ公演・合唱に出演の他、各地でコンサートに出演。子ども参加型オペラ「バンビーニ」、よみうりカルチャー北千住講師。二期会BLOC“Liebeslieder”メンバー。二期会会員。



森谷 健太郎 (Kentaro Moriya) 合唱

国立音楽大学声楽専修卒業。卒業を期に、バリトンからテノールへ転向。声楽を、服部陽介、久保田真澄、青柳素晴の各氏に師事。声楽の他にも、合唱指導、オペラの演出助手など、多岐に渡る活動をしている。



高橋 康晴 (Yasuharu Takahashi) 合唱

昭和音楽大学声楽学科卒業。七條功、松浦健、中村佳子、宗像成弥、中島基晴の諸氏に師事。イタリア短期留学時にW.マッテウツィ、V.ベッロに師事。昭和音楽大学オペラ公演『夢遊病の娘』『ピア・デ・トロメイ』『ファルスタッフ』『フィガロの結婚』、四国二期会公演『ドン・ジョバンニ』『ファルスタッフ』、首都オペラ『トゥーランドット』パン役に出演。2015年4月Opera Novella主催『ラ・ボエーム』にロドルフォ役で出演。



©Taira Nishimaki

伊東 達也 (Tatsuya Ito) 合唱

東京藝術大学を卒業。卒業時にアカンサス音楽賞、同声会賞を受賞。オペラでは、W.A.Mozart『ドン・ジョヴァンニ』レポレッロ、G.Rossini『絹のはしご』ジェルマーノを演じる。また、G.Rossini『アルジェのイタリア女』タッデーオ、『チェネントラ』ダンディーニ、G.Donizetti『ランメルモールのルチア』エンリーコのアンダースタディを務める。



山田 健人 (Kento Yamada) 合唱

石川県出身。国立音楽大学演奏学科声楽専修卒業。石野和佳子、秋葉京子、黒田博の各氏に師事。「ジャンニ・スキッキ」ピネッリーノ、「カルメン」ダンカイロ、「ドン・ジョヴァンニ」マゼット等でオペラに出演。BS-TBSの日本名曲アルバムに出演。



渡辺 美穂 (Miho Watanabe) I.ヴァイオリン・コンサートマスター
3歳よりヴァイオリンを始め、故・久保田良作、ゲルハルト=ボッセ、ジェラール=ブーレ、澤和樹の各氏に師事する。全日本学生音楽コンクール全国大会第1位。東京芸術大学音楽学部附属高等学校、東京芸術大学を経て同大学院修了。2006年より東京フィルハーモニー交響楽団でセカンドヴァイオリンフォアシューピーラー、2012年より大阪フィルハーモニー交響楽団のコンサートマスターを務め、現在はゲストコンサートマスター、ソロなど幅広く活動中。

小池 彩織 (Saori Koike) II. ヴァイオリン

桐朋学園大学音楽学部を首席卒業。読売新人演奏会に出演。2009年ルーマニア演奏旅行。アフィニス夏の音楽祭2015広島に参加。ソロ、室内楽、オーケストラと幅広く活動中。

村松 龍 (Ryo Muramatsu) ヴィオラ

東京音楽大学卒業。全日本学生音楽コンクール東京大会小学生の部第2位。

小澤征爾音楽塾などに参加。NHK交響楽団団員

大内 麻央 (Mao Ohuchi) チェロ

東京藝術大学音楽学部を経て、同大学大学院修士課程を修了。これまでにチェロを、小野崎純、向山佳絵子、山崎伸子の各氏に師事。現在、東京フィルハーモニー交響楽団に在籍。

佐々木 晶子 (Shoko Sasaki) コントラバス

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、同大学音楽学部器楽科を卒業。

オーケストラ、室内楽を中心に活動中。埼玉県立大宮光陵高等学校音楽科非常勤講師。

島田 沙織 (Sori Shimada) フルート

神奈川県出身。東海大学静岡短期大学部卒業、尚美コンセルヴァトアール・ディプロマ科を修了。

東京藝術大学別科を修了。第9回仙台フルートコンクール一般部門入選。

大森 悠 (Haruka Ohmori) オーボエ

東京大学文学部卒業。ドイツ留学後セントラル愛知響、大阪交響楽団を経て、現在は大阪フィルハーモニー交響楽団首席奏者。池田肇、井口博之、O.ヴィンターの各氏に師事。

西崎 智子 (Tomoko Nishizaki) クラリネット

東京藝術大学を同声会賞を受賞し卒業後、同大学院修了。小澤征爾音楽塾オーケストラプロジェクト、サイトウキネンフェスティバル出演。現在オーケストラジャパンに在籍。

依田 晃宣 (Akinobu Yoda) ファゴット

東京藝術大学卒業。藝大フィルハーモニアファゴット奏者（藝大管弦楽研究部非常勤講師）を勤める傍ら、各地の音楽祭等にも多数出演を重ねている。

熊井 優 (Yu Kumai) I. ホルン

武蔵野音大卒業。兵庫芸術文化センター管弦楽団を経て、現在神奈川フィル契約団員小澤征爾音楽塾、東京のオペラの森、サイトウキネンフェスティバル松本に参加。

嵯峨 郁恵 (Ikue Saga) II. ホルン

東京藝術大学音楽学部卒業。第7回大阪国際室内楽コンクール第3位（木管五重奏「アンサンブル・ミクスト」）。横浜シンフォニエッタ2016年度シーズンメンバー。

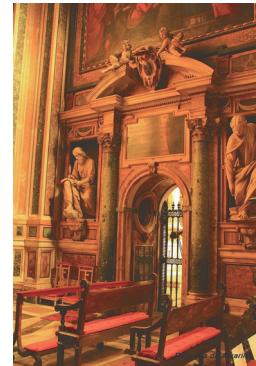
小原 由紀 (Yuki Ohara) 打楽器

東京音楽大学卒業。同大学教職課程管弦楽・吹奏楽指導助手。菅原淳、藤本隆文、野口力、岡田真理子、藤本佳子の各氏に師事。室内楽やオーケストラ等で活動する傍ら後進も指導している。

居福 健太郎 (Kentaro Ifuku) ピアノ

ソリストとして東京交響楽団、日本フィル、仙台フィル等のオーケストラと共に演奏。室内楽、歌曲伴奏において多くの演奏家の信頼を得ている。現在東京藝術大学非常勤講師。

ローマ観光「トスカ」コース



「トスカ」第1幕の舞台となる聖アンドレア・デッラ・ヴァッレ教会は、1650年に完成したバロック様式の教会です。オペラの冒頭、アンジェロッティが逃げ込んだアッタヴァンティ家の礼拝堂や、第1幕フィナーレのテ・デウムの莊厳な響きが思い浮かびます。



ファルネーゼ宮殿は16世紀、A・d・S・イル・ジョヴァネの設計で、ミケランジェロによって完成したルネサンス建築です。現在はフランス大使館で、この最上階の執務室が第2幕の舞台です。



ローマから約60キロの距離にあるチヴィタヴェッキアには、古くから地中海の各地を結ぶ港があります。第2幕、トスカはスカルピアにチヴィタヴェッキアへの通行許可証を求めます。また第3幕では、トスカとカヴァラドッシはその通行許可証を手に、自由の身となり、チヴィタヴェッキアから船で逃れることを夢見ますが・・・



「トスカ」第3幕の舞台はサンタンジェロ城です。135年に靈廟として建設され、その後、要塞や牢獄として使用されました。サンタンジェロ城を最も有名にしたのは映画『ローマの休日』です。アン王女とジョーがファーストキスを交わした場所がサンタンジェロ城の前のテヴェレ河畔で。橋の下にはダンスパーティが行われた水上レストランがありました。